

Assault Lily SS

Queen VS Witch

著： 蜜瀬かえで

夏の盛りのことだった。

特に何という理由もなく。単に自らの臣下たちの様子でも見て回ろうかと、日傘を片手に街に出た。

ただ、普通に考えればわかったことだったが。

(……迎えの一人もいませんのね)

日傘を回し街を歩くが、人っ子一人出くわさない。皆、空調の効いた室内で自堕落に過ごしていることでしょう。

折角、女王自ら臣下の元へ出向いたというのに。

でも、まあこの暑さ。下手に出歩いて熱中症にでもなられてもそれはそれで困る。臣下の身を案じるのも女王としての勤めの一つだ。

(今日は、それが確かめられただけでも良しとしましょう)

そう思って、きびすを返したところに。

「お待ちになって、女王様」

何の気配もなく、振り返ると20代半ばほどの女が立っていた。

この暑い中でまた暑そうなローブ姿。

暑苦しくはないのかしら？

まあ、汗一つかいていないその顔を見ると、大丈夫そうでしょうけど。

繰り返すが、臣下の身を案じるのも女王としての勤めの一つなのだ。

「わたくしを呼び止めるとは、よほどの用件があつてのことでしょうね」

問いかけに女は「ええ」と頷き。

長いスカートの裾を持ち上げ、頭を垂れた。

「お初にお目にかかります『中路沙那女』様」

私、『千代御代』と申します。

一介の魔術師を生業としております。

そう女は宣った。

それに、ふん。と鼻を鳴らし、

「一介の魔術師風情でも礼儀はなっているようね」

ただし、

「わたくしの問いには答えていない」

「ええ。そうでした『用件』ですね」

はい。と、女は楽しそうに微笑みながら、

「私、実はこの世界の外からやって参りましたの」

馬鹿げたことを宣った。

そして、

「そしてそれは、お噂の女王様。貴女様と一つ、ゲームをしたいと思ひまして」

「……ゲーム？」

暑さで頭のおかしくなった女か。哀れな。

そう思いつつ、女の口にした言葉を繰り返す。少し気を惹かれたのは、折角の外出に特段の成果がなかったことも一因だった。

「言ってみなさい」

内容によつては、乗つてやらんことはい。

これもまた一興。

完全な気まぐれだ。

「僭越ながら、申し上げます」

その内容は、

「貴女様のレアスキル『メガヘヴィハードラック』」

それを無効化する一つの『空論』を思ひつきましたので。

「試してみてもよろしいでしょうか？」

「……ふざけている？」

「滅相もない」

真剣でございますよ？

「ふうん」

女は笑みを絶やさない。

正直、不気味なやつだ。

ただ、それでもわたくしの臣下にはかわりがない。この世の者はすべてわたくしの臣下なのだから。この女のふざけた言動も、正してやるのが勤めというものか。

「ちようど暇を持て余していたところでよかつたわね」
「では？」

「受けてたちましよう。その『ゲーム』とやら」

ルールは簡単。

貴女様が今から「一度」レアスキルを発動します。

それができれば貴女様の勝利。

できなければ僭越ながら私の勝利とさせていただきます。

「魔術師と言つたわね？」

戦えるの？

「ええ」

そう言つて、女が掲げたのはCHARM「シャルルマーニュ」。

「魔術師らしい」

「そちらこそ」

「ふうん」

くるりと日傘を返せば、そこに煌めくのは一つの宝玉。
マギクリスタルコア。

「合図は？」

「貴女様が、レアスキルを発動した瞬間」

それは、

「自分で言ったことを忘れたの？」

それはこちらの勝利条件だ。

「いいえ」

「止めるとでも？」

「止めるというのとは違いますね」

それでは、ゲームが始まりません。

まあ、やればわかります。

私の『空論』の結果が。

Assault Lily SS
Queen VS Witch

Assault Lily SS
Queen VS Witch

Assault Lily SS
Queen VS Witch

「魔術師、今、何をしたの？」

「何も」

「何もしていません。」

——否。

「何もしていないことになっています。」

「それを強いて言うなら、」

「『この世界のページを、ほんの少しでも白紙に書き換え』
させていただきました」

「は？」

「先ほども申しましたとおり、私はこの『世界』の外から
参った魔術師」

「よろしければ、私の『空論』に、しばしお付き合いた
だけますか？」

——『メガヘヴィハードラック』。

「実に興味深いレアスキルです。」

「自身の行動結果をすべて幸運に変え、周囲の結果をすべ
て悪運に変える。」

「私は、これを『ファンタズム』の亜種と考えました。」

「その理由は、単純。」

「貴女様のレアスキルが「行動の結果」に向けて作用する
からです。」

「対して『ファンタズム』は複数の仮定の世界線をのぞき
見て、欲しい結果に至るための動きや条件を瞬時に理解す
るスキルです。」

「この『ファンタズム』の、オートバージョンが貴女様の
レアスキルではないかと私は『空論』いたしました。」

「私の仮定するマジ時空。この物理世界と無数に重なり、
エネルギーではない、情報体としてのマジに満ちた世界
の中で『ファンタズム』世界のマジには、我々の世界より一
足先の未来の可能性と、そこへ至るための道筋が情報体と
して、それこそ無数に散らばっています。」

「『ファンタズム』はその中から、自身にとつての最善を
自ら選び抜く操作が自身の脳内で必要なスキル。」

「何が最善かなどは、その場その場の状況で変わりますか」

らね。

ただ、貴女様のは違う。

必ず1つの最適解があるのです。

選ぶ必要などない。

貴女様が、自身のマジ時空にアクセスした瞬間には、そのための情報、そこへ至るための道筋が「勝手に」集まってくるのです。

そして、その貴女様にとってプラスの情報は同時に、プラスであるが故、均衡を保つためにそれと同じだけマイナスの情報体を集めます。

貴女様は何もしなくていい。

レアスキルを発動し、自身と親和するマジ時空にアクセスして、そこに自身を置くだけで、1つの「未来」に向かうべく、ヒトもヒュージも全自然環境いたるまで、一つの道筋を完成させてしまう。

それがこの物理世界で発露した結果が、貴女様のレアスキルだと私は『空論』したのです。

まあ「何もしなくても」といっても、周囲の微細なマジ操作や手指のちよつとした動きなどを無意識に行なつて、物理空間に影響を与え、バタフライ効果を生んでいるのでしょうが。

「まあ、でも、そんなことはどうでもいいのです」

「……何ですって？」

散々わたくしのレアスキルをよくもわからない理屈で語った挙げ句に、「どうでもいい」とはどういうことだ。

「なぜなら」

女は言った。

「私は私の『空論』がたどり着く結果を知りたかっただけだからです」

なので、その過程である『空論』など、些細なこと。

「私が知りたかったのは『貴女様のレアスキルが及ぼす方向が未来だけに向いているかどうか』だからです」

それはどういうことか。

訊くまでも女は語る。

「先ほど私は申しました」

私はこの世界の外から来た、と。

「この世界は『完成された時点』で、すでにもう終わった『歴史』なのです」

歴史学はご存じですか？

以外とおもしろいのですよ？

曰く、『歴史』とは現在から見た過去であり、未来の者は現在という『歴史』をいくらでも書き換え可能である。

実は先ほど、私、貴女様と一戦交えています。

まあ、結果は御察しの通りですが。

いや、あそこまで魔術の発動失敗するのなんて初めてで、ほんとワクワクしましたよ。

なにもないところで転んだり。

とっておきの一発も見事に外れてこの一体焼け野原にもなりましたし。

最後の、貴女様のセリフも素晴らしかったので、あれだけが残してもよかったかもしれませんね。

で、その後すぐに、この世界の外から、その『歴史』の分だけ、世界を真っ白に塗りつぶしてみました。

その結果が、先ほどの貴女様のお言葉です。

（「魔術師、今、何をしたの？」）

「そう、『何か』はあったのです」

ただ、それがこのストーリーという『歴史』の中から抹消されただけ。

ただそれだけなのです。

そして、貴女様はそれを察することはできても、そこに

手を出すことはできなかった。

それは貴女様にとって。このストーリーが過去に起きた『歴史』としてもう、すでに書き終えられてしまっているからです。

そして、貴女様はその『歴史』には介入できない。

過去の結果を自身の幸運に変えられない。

「それが今回、私の知りたかったことよ」

そう途端にくだけた口調になる。

「最初に言ったでしょ？ これはゲームだって」

勝ち負けのあるゲーム。

そこでの勝敗条件は「レアスキルを発動できるか否か」。

私はちゃんと、その勝負の後、あなたがレアスキルを発動した戦いを終えてから、この世界を書き換えたわよ？

まあ、この『歴史』ではあなたは、「レアスキルを発動できていない」けれど。

魔術師。

(否、この女は『魔女』と言った方が正しい)

楽しげに微笑む笑顔に対して、

「詭弁ね」

「そうね」

あっさりと認めた。

「それで、あなたの詭弁に乗るのなら、わたくしが勝った

『歴史』とやらも存在はしていたのでしょうか？」

「ええ、もちろん」

なら、

「引き分けじゃないの？」

1対1だ。

「いえ、むしろあなたの『歴史』とやらではわたくしが先に勝っているのだから、わたくしの勝ちでしょう？」

それに、魔女は、

「おお」

たしかに。と、手を叩いた。

言わなきゃ、よかったかなあ。

いや、でも、言わなかったとして、私の中では存在した

『歴史』のひとつだし。

(……なにやらブツブツいいだしたけれど)

そろそろ、

「……暑いわ」

わたくしだって、こんなイカレた女と道ばたでありもしなかった『歴史』とやらについて語るほど暇ではない。

でも、まあ。

「いい暇つぶしにはなったわ」

そう言い残し、まだブツブツ言ってる暑さで頭をやられた女を残し、その場を後にする。

帰ったら、なにか冷たいものでも飲もうかと思いつつ。
